

第五次レッドリスト（案）に対する意見（パブリック・コメント）の概要と県の考え方

1 募集期間 2024 年 11 月 15 日（金）から 2024 年 12 月 14 日（土）まで

2 募集方法 郵便、ファクシミリ、電子メール

3 意見提出人数等

（1）提出人数 4 名（いずれも電子メール）

（2）提出件数 31 件

（3）内訳

ア 対象分類群別 維管束植物 5 件
鳥類 3 件
爬虫類 2 件
両生類 1 件
貝類 20 件 / 31 件

イ 意見の内容別 レッドリスト掲載種及び評価区分に関する意見 30 件
分類順、区分順、種名、学名の表記方法に関する意見 1 件 / 31 件

1 維管束植物

通番	意見の概要	県の考え方
1	実際の評価点があるのだと思いますが、フクド、バリバリノキは、より上位のランクに位置付く可能性はないでしょうか。	フクドについては、県内の既知産地が 2 か所で、どちらもごく最近の状況が確認できていません。以前調査したときには個体数はかなり多く、合わせて 100 以上と判断されたので、今回はその状態が継続しているとして評価しています。 バリバリノキについては、県内では 3 か所（大きく見れば 2 か所）で確認されており、個体数も合わせて 10 以上あると推定されます。しかし、本種は千葉県まで分布していますが、この場所は分布域の北側の縁にもなっています。今回は地点数階級 3、固有度階級 1 として評価しましたが、北側の縁であることを強調して固有度階級 2、生育地点数もまとめて 2（階級 4）とするならば、総点 14 で絶滅危惧 I B 類（EN）になります。生

通番	意見の概要	県の考え方
		物种の絶滅リスクは連続的な値をとるはずですが、それを不連続な4階級に分けているため、境界ではどうしても微妙な評価になってしまいます。
2	最近、トチカガミとみられる植物が県内で確認されています。水辺は、昔と比べるとかなり水生植物の多様性が低下しているとみられますが、人々の関心を維持して、状況を把握する必要があると思います（そのさい、水生植物には在来種でも植栽由来とみられるものが含まれるため、注意が必要と考えます）。	トチカガミについては、2000 年代初めころまでは平野部のところどころに生息していたのですが、ごく最近では名古屋市の一部で確認されているだけです。ただし、この場所では、近年やや増加傾向にあります。
3	ツツイトモは移入とされていますが、これは、日本在来のものが他地域から鳥散布などによってもたらされたことを指している場合は、移入とは見なされないのではないかと考えます。もし人為的な分布でなく、かつ貴重である場合は、掲載を維持するのが良いのではと考えます。	ツツイトモについては、今まで沿海地の養魚場跡地などに多かったのですが、2024 年秋に豊田市（旧下山村）でも確認されました。この場所のツツイトモはカモ類によって運ばれたと思われることから、沿海地のツツイトモも鳥によって持ち込まれた可能性を否定しにくくなりました。そうすると「移入の可能性があるから評価対象外」とは言えなくなりますが、評価対象に入れたとしてもリスト外と判定され、「国リスト」という評価区分は変わりません。
4	ホウロクイチゴは、紀伊半島で多数生育している種であり、愛知県内においても生育している可能性が依然としてあるため、可能であれば注意喚起のために掲載を維持するのが望ましいと考えます。	レッドリストは、県内に定着・生育している/いた生物について、絶滅のリスクを評価するものです。ホウロクイチゴは「県内に定着・生育している/いた」という確実な証拠がなく、今回過去の記録も疑わしいと判断されました。生育している/いたという明確な証拠（原則として標本）が得られるまで、レッドリストに掲載することはできません。
5	これは備考的なことですが、ヒモランなど、樹木に着生して生育する植物については、その種への配慮のみならず、着生している樹木そのものへの配慮が求められます。着生している樹木が何らかの影響で枯死する可能性を考慮した対応が求められます。	着生植物は、もちろん着生していた樹木が枯死すれば消失しますが、その樹木の枯死が自然現象の範囲内ならば、着生していた植物の消失も自然現象内と判断されます。自然の中の生物は、そのようなリスクを織り込みながら、過去から現在まで存続してきたものです。

2 鳥類

通番	意見の概要	県の考え方
6	分類・配列・名称は「グリーンデータブックあいち 2018」に従ったのですが、9月に日本鳥学会が「日本鳥類目録改訂第8版」（以下、目録8版）を発行していますので、これの掲載鳥類リストに従うべきだと思います。自分なりの変更リスト（別表）を添付しますので、参考にいただければ幸いです。	御意見のとおり、「日本鳥類目録改訂第8版」に準拠することとし、同目録に従い修正します。
7	アカハラの[越冬]に「越冬個体は北方で繁殖する別亜種である」とありますが、森岡（1979）や目録8版を見る限り、北方で繁殖する亜種（オオアカハラ）だけでなく亜種アカハラも本州で越冬しており、修正が必要だと思います。	冬期の観察では、顔の色などから亜種オオアカハラとした記録が多くありますが、亜種アカハラとの識別が不明な個体の記録も多いため、御意見を踏まえ、備考欄の記載を「越冬個体は北方で繁殖する別亜種とされるが、識別が不明の個体も多い。」に修正します。
8	ノジコの[通過]に「近年は越冬期の確認数が減少している」とありますが、越冬ではないので、「越冬期の」は不要だと思います。	御意見のとおり修正します。

3 爬虫類

通番	意見の概要	県の考え方
9	DDであるシロマダラを、レッドデータブックあいち2000において「○」で示された地域で昨年確認しました。DDの種のこうした未発表情報をどうすればレッドリストの検討に活かしてもらえるか、明示していただきたいです。	愛知県絶滅危惧種等調査検討会では、県内の希少種の生息情報・非生息情報を随時収集し、レッドリストにおける評価に活用しています。 情報の積み重ねが重要であり、皆さまから寄せられた情報もその重要な要素の1つとなりますので、希少種の確認情報等があれば、愛知県環境調査センター宛に種名、観察地点、観察日時、写真等の情報をお寄せください。 宛先：愛知県環境調査センター(kankyo-c@pref.aichi.lg.jp) なお、上記内容について明示するため、希少種の確認情報等の募集について、ウェブサイト等への掲載を検討します。

通番	意見の概要	県の考え方
10	ヤマカガシ 餌となるカエルが減少傾向にあり、それに伴う本種の減少も顕著である。	ヤマカガシについては、かつて全県的に最普通種のヘビとして捉えられていましたが、現在では平野部の集団はほぼ消滅しています。一方、丘陵地、山地では現在でも広域にわたってしばしば姿を見かける種ではあり、他のヘビ類に比べて特に少ないという知見はありません。過去の高密度で見られた状況と比較すると、本種が過去のいずれかの段階で大きく数を減らしたことは明らかなですが、全県レベルの事象として種の存続への圧迫が強まっていると判断できるか、今後もこの傾向が進行するおそれがあるか等について客観的に検証する材料を得ることができておらず、今回のレッドリストの改訂では情報不足（DD）のままの評価区分と判定されました。 ヘビ類の生息密度に関しては、今後もまとまった情報を得ることが難しく、判断材料が大幅に増える見込みがありません。類似の状況にある他の種も含め、いずれかの段階でヘビ類の評価区分について見直しが必要であることが考えられ、今後も情報収集に努めて参ります。

4 両生類

通番	意見の概要	県の考え方
11	アズマヒキガエル 県内全域で著しい減少傾向にあり、リスト入りが必要と考える。	アズマヒキガエルについては、かつて市街部も含めて全県的に普通種のカエルでしたが、現在では、平野部の集団はごく局所的に残存するのみとなっています。一方、本種は、丘陵地、山地では広域にわたって夜間にしばしば姿を見かける種であり、大規模な産卵地は減少の一途をたどっているものの、沢のよどみや林道の側溝等で見られる小規模な産卵地はまだ頻繁に見かけることのできる状況です。このため本種に関しても、過去の高密度で見られた状況と比較すると、過去のいずれかの段階で大きく数を減らしたことは明らかなですが、全県レベルの事象として種の存続への圧迫が強まっていると判断できるか、今後もこの傾向が進行するおそれがあるか等について客観的に検証する材料を得ることができておらず、今回のレッドリストの改訂ではリスト入りを見送りました。 本種の小集団の消滅については近年でも依然として情報が入っており、引き続きその動向に注視が必要と考えられます。

5 貝類

通番	意見の概要	県の考え方
12～30	貝類について、以下の通り意見します。	根拠論文を示された丁寧な御意見をいただき、誠にありがとうございます。
12	タケノコカワニナの区分が「EX」になっていますが、タケノコカワニナは名古屋市大江川にて2023年に生貝が確認されています（川瀬，2024）。大江川では埋立工事が行われると報道がありましたが、名古屋市内の別の河川に移植が行われたため、現在も生息していることが期待されます。このことから、区分は「CR」が適当だと考えます。 参考文献： 川瀬基弘・市原 俊・横井敦史，2024. 名古屋市大江川感潮域に棲息する貝類. なごやの生物多様性，11：105-113.	タケノコカワニナについては、かつて記録があった本種の生息環境が保全された産地に本種が現れたわけではなく、都市近郊の本種本来の生息環境とは言えない場所に突然現れた個体群であり、在来か移入個体群かの区別も定かではありません。また、本分類群の正確な分類にはDNA解析が不可欠とされており、現時点で新たに詳細な種同定と評価ができません。これらのことから、現状のままの評価となっております。 今後、これらのことが解明されれば、御意見のような評価区分に変更される可能性は十分にあります。なお、レッドリストは自然状態で存続して

通番	意見の概要	県の考え方
		いる集団だけを評価対象としており、移植された集団が生存していても、自然分布地の集団が消滅した場合には「絶滅」と評価されます。
13	マツカサガイは Lopes-Lima et al. (2020) によって 3 種に分かれることが明らかになりました。Lopes-Lima et al. (2020) に示された各種の分布域によれば、愛知県には <i>Pronodularia</i> cf. <i>japanensis</i> 2 (Lea, 1859) マツカサガイ東海固有種のみが分布します。新種記載されたわけではありませんが、保全を要する単位としては「マツカサガイ東海固有種」が適切と考えます。 参考文献： 近藤高貴, 2020. イシガイ科貝類の新たな分類体系. ちりぼたん, 50 (2) : 294-296. Lopes-Lima, M., Hattori, A., Kondo, T., Hee Lee, J., Ki Kim, S., Shirai, A., Hayashi, H., Usui, T., Sakuma, K., Toriya, T., Sunamura, Y., Ishikawa, H., Hoshino, N., Kusano, Y., Kumaki, H., Utsugi, Y., Yabe, S., Yoshinari, Y., Hiruma, H., Tanaka, A., Sao, K., Ueda, T., Sano, I., Miyazaki, J.I., Gonçalves, D.V., Klishko, O.K., Konopleva, E.S., Vikhrev, I.V., Kondakov, A.V., Yu. Gofarov, M., Bolotov, I.N., Sayenko, E.M., Soroka, M., Zieritz, A., Bogan, A.E. and Froufe, E., 2020. Freshwater mussels (Bivalvia: Unionidae) from the rising sun (Far East Asia): phylogeny, systematics, and distribution. <i>Molecular Phylogenetics and Evolution</i>, 146: 106755. https://doi.org/10.1016/j.ympev.2020.106755	マツカサガイには隠蔽種が含まれる可能性が示唆されるものの、mtDNA の系統が分化した 3 群を独立種とするには根拠が不十分であること、各群の識別形質も見出されていないことから、現段階ではこれらを個別に評価するのが難しい状況にあります。また、愛知県内に分布する全個体群の DNA 解析はなされておらず、東海固有種のみが分布しているとは断定できません。これらのことから、今回は現状のままの表記としております。 種の実態に基づく詳細な絶滅リスクの評価は今後の課題となります。
14	豊橋市の石巻山の上に生息するクビナガギセルは、15 年ほど前と比較して個体数が激減しています (personal observation)。定性的要件の「既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している」、「既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている」、定量的要件の「表 4 の評価点の合計が 22~27」により、絶滅危惧 IB 類	クビナガギセルについては、過去にも個体数の増減が激しい種であることが認識されており、また、本種の生息する石巻山山頂部は、登山道以外に入山禁止となっているため、捕獲圧はある程度抑えられていると考えられます。加えて、近年、他の地域でも個体群が確認されているとの情報もあります。これらのことから、現状の評価となっております。

通番	意見の概要	県の考え方
	(EN)に該当すると考えます。	今後の生息状況の推移を鑑みて、評価区分が高くなる可能性は十分に考えられます。 なお、御指摘の「第五次レッドリスト（案）について（概要版）」表4の準定量的要件は鳥類についての基準であり、貝類には適用されません。
15	ヒメヒラマキミズマイマイは、備考に「2023 年、ヒラマキミズマイマイの幼貝と明らかに異なる本種の生息確認」と書かれていますが、2016 年に殻形態だけでなく遺伝子情報でもヒメヒラマキミズマイマイであることが確認されている報告（川瀬ほか，2016）がありますので、このコメントは不適切と考えます。 参考文献： 川瀬基弘・松原美恵子・森山昭彦，2016. 愛知県西三河地域から採集されたヒラマキガイ属 3 種：形態と遺伝子情報による解析. 陸の水，74：43-48.	本種（和名：ヒメヒラマキミズマイマイ）は未記載種であり、かつ必ずしも 1 種であるとも確定されていません。県内でも調査不足であるのに加え、全国レベルでも分類学的な検討が不足しており、現状はこのような表記としております。また、本種とされる種（近似の別種の可能性もある）は都市部の攪乱された水域でも生息が確認されているので、移入他種の混同の可能性も現時点で否定できません。
16	フネドブガイは、犬山市の入鹿池（近藤ほか，2013）から報告されていますが、在来であると考察されていますので、「移入個体群の可能性が高い」という備考およびそれに基づくランク付けは適当でないと考えます。なお、豊橋市大岩町火打坂の三ッ池中池（西ほか，2014）、豊橋市岩田町の上庄池（坂本ほか，2019）、名古屋市西区山田町の庄内緑地内ガマ池（横井，2020，2021）から“フネドブガイ”の報告がありますが、西ほか（2014）および横井（2020，2021）で報告された“フネドブガイ”については、川瀬（2021）によりヤハズヌマガイと判明しています。また、坂本ほか（2019）の“フネドブガイ”は遺伝子は未解析ですが、形態的にはヤハズヌマガイと一致します。ヤハズヌマガイについても、生息地が極限されていること等からレッドリストに掲載すべきだと考えます。 参考文献： 川瀬基弘，横山悠理，横井敦史，熊澤慶伯. 2021. 愛知県名古屋市，豊橋市，山梨県北杜市で発見された <i>Buldowskia shadini</i> ヤハズヌマガイ	フネドブガイについては、近年、御意見のようなデータがありますが、どれも全県レベルの総合的なデータではなく、在来種であると完全に認められているわけではないため（入鹿池は県内の湖沼の中でも、最も人為的な攪乱や外部からの生物の持ち込みが多い水域の一つ）、本分類群では分類形質として確実ではない貝殻形態のみに基づく同定は採用できません。また、過去に本種が多数生息していたことや標本が残っていた例も確認されておらず、もし本種が在来種であるとしても個体数の減少の程度を評価すること自体が極めて困難なので、現状のと通りの扱いとしています。

通番	意見の概要	県の考え方
	(新称). 瀬木学園紀要, (18): 3-9. 近藤美麻・秋山吉寛・ノエリカント ラマモンジソア・伊藤健吾・千家正照, 2013. 東海地方初記録の淡水二枚貝フネドブガイ <i>Anemina arcaeformis</i> (イシガイ科: ドブガイ族). ちりぼたん, 43(1-4): 58-64. 西 浩孝・坂本博一・松岡敬二. 2014. 三河地方初記録の淡水生二枚貝フネドブガイ. 豊橋市自然史博物館研究報告 24: 21-23. 坂本博一・西 浩孝・松岡敬二. 2019. 豊橋市の上庄池と大口池で確認された淡水動物. 豊橋市自然史博物館研究報告, (29): 13-20. 横井敦史. 2020. 名古屋市で初めて記録されたフネドブガイ. なごや生物多様性センター 生きものシンフォニー いのちかがやくなごや, 30: 4. 横井敦史, 2021. 名古屋市西区で発見されたフネドブガイ. なごやの生物多様性, 8: 87-90.	
17	案で「国リスト」となっているオオギセルは少なくとも一部の生息地において生息環境の悪化や過度の採集圧、それに伴う個体数の減少が進行しており、NT以上にランクされるべきだと考えます。	オオギセルについては、奥三河地域では優占種である場所も多く、現状では国リストとなっています。一時、個体数が著しく減少していた産地でも、近年回復傾向が認められています。
18	ドブガイをリストから除外するとのことですが、それに含まれていたヌマガイ、ミナミタガイは生息条件が悪化していること、現在生息している場所でも大型個体しか見られず世代交代が行われていないと考えられる場所が少なくないこと等から、NT以上にランクされるべきだと考えます。	現行の分類ではヌマガイはヌマガイ種群 <i>Sinanodonta lauta species complex</i>、タガイはミナミタガイ <i>Beringiana fukuharai</i> に相当します。現状では過去の生息状況との比較など、各タクソン(分類群)の絶滅リスクが評価できていない状況ですので、評価区分を情報不足 (DD) に修正します。
19	豊田市で確認されているコウフオカモノアラガイ (河辺ほか, 2023) は準定量的要件 (表 4 の評価点の合計が 10~15) から NT としてレッドリストに掲載すべきだと考えます。環境省レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に選定されていることから、少なくとも国リストとして掲載すべきです。 参考文献:	ヒメオカモノアラガイなどを含めた本種群については、一地域での断片的な産出状況が報告されていますが、調査不足や分類学的な区別の困難さから過去の生息状況との比較もできておりません。 このため、コウフオカモノアラガイについては、評価区分を情報不足 (DD) に修正します。

通番	意見の概要	県の考え方
	河辺勇治・瀬口 純・伴 邦教・川瀬基弘, 2023. 豊田市で確認されたコウフオカモノアラガイ. 豊橋市自然史博物館研究報告, (33): 49-51.	なお、御指摘の「第五次レッドリスト（案）について（概要版）」表4の準定量的要件は鳥類についての基準であり、貝類には適用されません。
20	豊橋市で確認されているカワネミジンツボ（西・藤野, 2022）は準定量的要件（表4の評価点の合計が10～15）からNTとしてレッドリストに掲載すべきだと考えます。環境省レッドリストにDDとして掲載されていることから、少なくとも国リストとして掲載すべきです。 参考文献： 西 浩孝・藤野勇馬, 2022. 愛知県豊橋市でのカワネミジンツボの棲息状況及び形態的特徴. かきつばた, (47): 44-46.	カワネミジンツボについては、単一の論文ではありますが、本種の生息域の特殊性を鑑みて、御意見を踏まえて再検討し、評価区分を情報不足（DD）に修正します。 今後、データの集積により高い区分と評価される可能性があります、本種のような特殊環境に生息する種の調査をし、評価区分を決定することは、この先も困難であると考えられます。根拠となる情報があれば、論文などで公開していただけると幸いです。
21	豊根村などで確認されているミジンナタネは、愛知県では稀少と指摘されており（早瀬ほか, 2021）、DD以上としてレッドリストに掲載すべきだと考えます。 参考文献： 早瀬善正・木村昭一・岩田明久・西 浩孝, 2021. 茶臼山山頂部周辺（愛知県豊根村）で確認された陸産貝類. 日本貝類学会特別出版物, (5): 77-132.	ミジンナタネについては、御意見を踏まえて再検討し、評価区分を情報不足（DD）に修正します。今後、データの集積により高い区分と評価される可能性があります、多くの情報が蓄積されない場合は、次のレッドリスト改訂でも評価区分が情報不足（DD）となる可能性が高いと思われます。 なお、現在、本種のような微小種の生息調査は困難な状況ですので、根拠となる情報があれば、論文などで公開していただけると幸いです。
22	豊根村で確認されているパツラマイマイ（早瀬ほか, 2021）は、外来個体群の可能性が否定できないものの、生息地が極限されていること、生息条件が著しく悪化していることからDD以上としてレッドリストに掲載すべきだと考えます。 参考文献： 早瀬善正・木村昭一・岩田明久・西 浩孝, 2021. 茶臼山山頂部周辺（愛知県豊根村）で確認された陸産貝類. 日本貝類学会特別出版物, (5): 77-132.	パツラマイマイについては、県内の1か所の狭い範囲で、かつ人為的な牧場的環境でしか生息が確認されておらず、その生息地周辺には多くの植栽や園芸植物が植えられており、多くの移入植物が報告されています。本種も移入個体群の可能性が低くないので、現状では評価外としております。
23	奥三河に分布し、早瀬ほか（2021）によって新称提唱されたオクミカワギセルは、これまでミカワギセルに包含されていたことから、ミカワギセル	オクミカワギセルについては、県内の分布域の詳細が判明しておらず、本種は和名だけの未記載種であるため、現状では評価外としています。今

通番	意見の概要	県の考え方
	と同等の NT 以上のランクに位置づけるべきだと考えます。 参考文献： 早瀬善正・木村昭一・岩田明久・西 浩孝. 2021. 茶臼山山頂部周辺（愛知県豊根村）で確認された陸産貝類. 日本貝類学会特別出版物, (5) : 77-132.	後、データの集積により高い区分の種と評価される可能性があります。 なお、本種の分布域は県北部山地で陸産貝類の個体数が少なく、調査自体が困難な状況ですので、根拠となる情報があれば、論文などで公開していただけると幸いです。
24	豊根村で確認されているオオコウラナメクジ（早瀬ほか, 2021）は、準定量的要件（表 4 の評価点の合計が 10～15）から NT としてレッドリストに掲載すべきだと考えます。環境省レッドリストでは NT に選定されていることから、少なくとも国リストとして掲載すべきです。 参考文献： 早瀬善正・木村昭一・岩田明久・西 浩孝. 2021. 茶臼山山頂部周辺（愛知県豊根村）で確認された陸産貝類. 日本貝類学会特別出版物, (5) : 77-132.	オオコウラナメクジについては、御意見を踏まえて評価区分を再検討しました。県内の分布域の詳細が判明しておらず、ナメクジ類の標本を含めた過去のデータは極めて少ないことから、情報不足（DD）に修正します。今後、データの集積により高い区分の種と評価される可能性があります。 なお、本種は個体数が少なく、調査自体が困難な状況ですので、根拠となる情報があれば、論文などで公開していただけると幸いです。
25	豊根村で確認されているトガリキビ（早瀬ほか, 2021）は、準定量的要件（表 4 の評価点の合計が 10～15）から NT としてレッドリストに掲載すべきだと考えます。環境省レッドリストでは DD として掲載されていることから、少なくとも国リストとして掲載すべきです。 参考文献： 早瀬善正・木村昭一・岩田明久・西 浩孝. 2021. 茶臼山山頂部周辺（愛知県豊根村）で確認された陸産貝類. 日本貝類学会特別出版物, (5) : 77-132.	トガリキビについては、御意見を踏まえて評価区分を再検討しました。県内の分布域の詳細が判明しておらず、いわゆるベッコウマイマイ・シタラ類の標本を含めた過去のデータは極めて少ないことから、情報不足（DD）に修正します。今後、データの集積により高い区分と評価される可能性があります。 本種は個体数が少なく、調査自体が困難な状況ですので、根拠となる情報があれば、論文などで公開していただけると幸いです。 なお、御指摘の「第五次レッドリスト（案）について（概要版）」表 4 の準定量的要件は鳥類についての基準であり、貝類には適用されません。
26	豊根村で確認されているハクサンベッコウ（早瀬ほか, 2021）は、環境省レッドリストでは DD として掲載されていることから、少なくとも国リストとして掲載すべきです。 参考文献： 早瀬善正・木村昭一・岩田明久・西 浩孝. 2021. 茶臼山山頂部周辺（愛	ハクサンベッコウについては、御意見を踏まえて評価区分を再検討しました。県内の分布域の詳細が判明しておらず、いわゆるベッコウマイマイ・シタラ類の標本を含めた過去のデータは極めて少ないことから、情報不足（DD）に修正します。今後、データの集積により高い区分と評価される可能性があります。

通番	意見の概要	県の考え方
	知県豊根村)で確認された陸産貝類. 日本貝類学会特別出版物, (5): 77-132.	なお、本種は個体数が少なく、調査自体が困難な状況ですので、根拠となる情報があれば、論文などで公開していただけると幸いです。 国リストは、環境省レッドリストに記載されているものの、県内での生息状況を鑑みて絶滅の危惧がないと評価された種なので、本種は該当しません。
27	南知多町で確認されているカスミミノウミウシおよびハンミョウミノウミウシは危機的な状況にある可能性が指摘されており（柏尾ほか, 2021）、レッドリストに掲載すべきだと考えます。 参考文献： 柏尾 翔・川瀬基弘・鶴飼 普・大矢美紀・西 浩孝・浅田 要, 2021. 愛知県南知多町の潮間帯に生息するウミウシ類 I（裸鰓目）. なごやの生物多様性, (8): 1-22.	ウミウシ類は、通常の貝類とモニタリング方法が大きく異なり、全体的に調査不足です。ウミウシ類の標本を含めた過去のデータは極めて少なく、現状では殆どの種を評価外としています。特に過去の生息状況との比較が困難で、評価外の状況は継続するものと考えられます。根拠となる情報があれば、論文などで公開していただけると幸いです。
28	環境省レッドリストで絶滅危惧 II 類に選定されているシナヤカスエモノガイの新鮮な死殻が田原市で確認されていることから（西, 2021）、レッドリストに掲載すべきだと考えます。 参考文献： 西 浩孝. 2021. 愛知県田原市で絶滅危惧種の二枚貝シナヤカスエモノガイを確認. 豊橋市自然史博物館研究報告, (31): 33-34.	シナヤカスエモノガイについては、県内の分布域の詳細が判明しておらず、外洋に面した湾口部の海岸に漂っていた死殻 2 個体 1 例のみの確認であり、県内に確実に生息しているとは言えません。しかし、近隣県・市における分布の現状を考えると生息していた可能性が高く、御意見を踏まえて再検討した結果、評価区分を情報不足（DD）に修正します。 今後、データの集積により高い区分の種と評価される可能性があります。なお、本種は個体数が少なく、また潮下帯が生息域であるため、調査自体が困難な状況です。根拠となる情報があれば、論文などで公開していただけると幸いです。
29	アサリは 2011 年から 2020 年にかけて漁獲量が 10 分の 1 程度に激減しています。ウチムラサキは過去からの正式な統計はないようですが、40 年前から 10 分の 1 以下になっているそうです。一時的な変動ではなく、干潟・浅場環境の悪化に伴うものだと考えられます。VU の要件「大部分の個体群で個体数が大幅に減少している」に該当すると考えます。 参考：	漁獲量の増減には漁獲努力の増減の影響も考えられ、本質的な個体数の変化までは捉えきれず、現状ではアサリ・ウチムラサキはともにリスト外としております。今後、データの集積により絶滅危惧種となる可能性があります。根拠となる情報があれば、論文などで公開していただけると幸いです。

通番	意見の概要	県の考え方
	https://www.pref.aichi.jp/soshiki/suisan/0000003831.html https://www.chunichi.co.jp/article/681692	
30	アマモ場に生息するヒメイカは、アマモ場そのものが減少していることから、NT 以上としてレッドリストに掲載すべきだと考えます。 参考文献： 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男. 2016. 梶島（三河湾）の潮間帯貝類相. かきつばた 41: 7-39. 武田和也・家田喜一・石田俊朗・石田基雄. 2005. 三河湾の人工干潟域に出現した大型表在動物相. 愛知県水産試験場研究報告, (11): 25-35. 矢澤 孝・小山舜二. 1997. 角建網漁獲物からみた三河湾沿岸域に來遊する魚介類の長期変動. 愛知県水産試験場研究報告, (4): 33-39.	頭足類については、サンプリング、モニタリング方法が他の貝類と大きく異なり、ヒメイカも複数種混在の可能性も報告されていますが、県内産本種群の分類学的な検討もできていませんので、現在、本県のレッドリストでは評価対象外としています。
31	ドブガイ 複数属複数種が混在しており、種として評価出来ないというのは理解するが、県内全域において生息地および生息数ともに著しく減少しており、リストから外れる事で、開発等による減少に歯止めがかからなくなるおそれがある。 また、保全をする上でも大きな支障となる。	近年の DNA 解析による分類学的な進展で、旧リストで NT と評価したドブガイには最近発見されている近似種、移入個体群が混同されている可能性があり、現状では評価自体が困難な状況となっています。 現状では同定が困難な種であるのですが、御意見を踏まえて再検討し、評価区分を情報不足（DD）に修正します。 また、評価区分を決定するには幼生の形態観察や DNA 解析が必要であるため、評価自体が困難な状況は継続するものと考えられます。

◇日本鳥類目録改訂第8版に従うと変更になる箇所(黄色セル)

No. 2025 分類順	No. 2025 区分順	目名	科名	種名 (和名)	学名	愛知県 リストの区分 2025 (案)
63	1	チドリ	シギ	オオジシギ		EX
64	2					VU
134	3	スズメ	ヨシキリ	ヨシキリ		EX
135	4					CR
141	5	スズメ	ツグミ	マミジロ	<i>Geokichla sibirica</i> (Pallas)	EX
142	6					EN
145	7	スズメ	ツグミ	アカハラ		EX
146	8					リスト外
151	9	スズメ	ヒタキ	コマドリ	<i>Larvivora akahige</i> (Temminck)	EX
152	10					EN
155	11	スズメ	セキレイ	ビンズイ		EX
156	12					VU
157	13	スズメ	ホオジロ	ホオアカ		EX
158	14					NT
159	15	スズメ	ホオジロ	ノジロ		EX
160	16					EN
50	17	チドリ	シギ	エリマキシギ	<i>Calidris pugnax</i> (Linnaeus)	CR
54	18	チドリ	シギ	ヒバリシギ		CR
55	19	チドリ	シギ	ヘラシギ	<i>Calidris pygmaea</i> (Linnaeus)	CR
59	20	チドリ	シギ	シベリアオオハシシギ		CR
69	21	チドリ	シギ	カラフトアオアシシギ		CR
70	22	チドリ	ツバメチドリ	ツバメチドリ		CR
71	23					EN
81	24	ペリカン	サギ	ヨシゴイ		CR
82	25					CR
102	26	タカ	タカ	チュウヒ		CR
103	27					VU
110	28	フクロウ	フクロウ	コノハズク		CR
111	29					VU
118	30	ブッポウソウ	ブッポウソウ	ブッポウソウ		CR
119	31					VU
122	32	ブッポウソウ	カラセミ	ヤマセミ		CR
123	33					CR
132	34	スズメ	モズ	チゴモズ		CR
133	35	スズメ	モズ	アカモズ		CR
143	36	スズメ	ツグミ	クロツグミ		CR
144	37					NT
1	38	カモ	カモ	コクガン		EN
7	39	カモ	カモ	ヒロードキンクロ	<i>Melanitta stejnegeri</i> (Ridgway)	EN
12	40	キジ	キジ	ウズラ		EN
13	41	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus jotaka</i> Temminck & Schlegel	EN
14	42					VU
28	43	カイツブリ	カイツブリ	アカエリカイツブリ		EN
39	44	チドリ	チドリ	シロチドリ		EN
40	45					VU
41	46	チドリ	タマシギ	タマシギ		EN
42	47					EN
44	48	チドリ	シギ	ホウロクシギ		EN
46	49	チドリ	シギ	オオソリハシシギ		EN
47	50	チドリ	シギ	オグロシギ		EN
51	51	チドリ	シギ	キリアイ	<i>Calidris falcinellus</i> (Pontoppidan)	EN
52	52	チドリ	シギ	ウズラシギ		EN
60	53	チドリ	シギ	オオハシシギ		EN
65	54	チドリ	シギ	メリケンキアシシギ	<i>Tringa incana</i> (Gmelin)	EN
67	55	チドリ	シギ	タカブシギ		EN
68	56	チドリ	シギ	ツルシギ		EN
75	57	チドリ	カモメ	コアシサシ	<i>Sternula albifrons</i> (Pallas)	EN
76	58					VU
80	59	ペリカン	サギ	サンカノゴイ		EN
89	60	ペリカン	サギ	クロサギ		EN
95	61	タカ	タカ	クマタカ		EN
96	62					EN
105	63	タカ	タカ	サシバ		EN
106	64					NT
108	65	フクロウ	フクロウ	アオバズク	<i>Ninox japonica</i> (Temminck & Schlegel)	EN
109	66					VU
114	67	フクロウ	フクロウ	トラフズク		EN
128	68	スズメ	ヤイロチョウ	ヤイロチョウ		EN
129	69					VU
136	70	スズメ	センニュウ	オオセツカ		EN
139	71	スズメ	キバシリ	キバシリ		EN
140	72					VU
161	73	スズメ	ホオジロ	コジュリン		EN
2	74	カモ	カモ	ツクシガモ		VU
3	75	カモ	カモ	オシドリ		VU
4	76					NT
5	77	カモ	カモ	トモエガモ	<i>Sibirionetta formosa</i> (Georgi)	VU
6	78	カモ	カモ	シノガモ		VU
17	79	カッコー	カッコー	ジュウイチ		VU
18	80					NT
19	81	カッコー	カッコー	ツツドリ		VU
20	82					NT
21	83	カッコー	カッコー	カッコー		VU
22	84					NT

No. 2025 分類順	No. 2025 区分順	目名	科名	種名 (和名)	学名	愛知県 リストの区分 2025 (案)
24	85	ツル	クイナ	バン		VU
25	86					NT
26	87	ツル	クイナ	ヒクイナ	<i>Zapornia fusca</i> (Linnaeus)	VU
27	88					NT
29	89	カイツブリ	カイツブリ	ミミカイツブリ		VU
31	90	チドリ	セイタカシギ	セイタカシギ		VU
32	91					NT
33	92	チドリ	チドリ	ケリ		NT
34	93					VU
37	94	チドリ	チドリ	イカルチドリ		VU
38	95					NT
43	96	チドリ	シギ	コシヤクシギ		VU
45	97	チドリ	シギ	ダイシャクシギ		VU
48	98	チドリ	シギ	オバシギ		VU
49	99	チドリ	シギ	コオバシギ		VU
53	100	チドリ	シギ	オジロトウネン		VU
56	101	チドリ	シギ	トウネン		VU
57	102	チドリ	シギ	ミユビシギ		VU
58	103	チドリ	シギ	ハマシギ		VU
62	104	チドリ	シギ	アオシギ		VU
66	105	チドリ	シギ	アカアシシギ		VU
72	106	チドリ	カモメ	ズグロカモメ	<i>Saundersilarus saundersi</i> (Swinhoe)	VU
79	107	ペリカン	トキ	クロツラヘラサギ		VU
83	108	ペリカン	サギ	ミソゴイ		VU
84	109					NT
91	110	タカ	ミサゴ	ミサゴ		VU
92	111					リスト外
93	112	タカ	タカ	ハチクマ		VU
94	113					リスト外
100	114	タカ	タカ	オオタカ		VU
101	115					VU
104	116	タカ	タカ	ハイイロチュウヒ		VU
112	117	フクロウ	フクロウ	オオコノハズク	<i>Otus semitorques</i> Temminck & Shlegel	VU
113	118					NT
115	119	フクロウ	フクロウ	コミズク		VU
120	120	ブッポウソウ	カワセミ	アカショウビン		VU
121	121					NT
124	122	キツツキ	キツツキ	オオアカゲラ		VU
125	123					NT
126	124	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ		VU
127	125					NT
137	126	スズメ	ミソサザイ	ミソサザイ		VU
138	127					NT
149	128	スズメ	ヒタキ	コルリ	<i>Larvivora cyane</i> (Pallas)	VU
150	129					NT
153	130	スズメ	カワガラス	カワガラス		VU
154	131					VU
8	132	カモ	カモ	クロガモ		NT
9	133	カモ	カモ	カワアイサ		NT
10	134	キジ	キジ	ヤマドリ		NT
11	135					NT
15	136	アマツバメ	アマツバメ	ヒメアマツバメ		NT
16	137					NT
23	138	ツル	クイナ	クイナ		NT
30	139	チドリ	ミヤコドリ	ミヤコドリ		NT
35	140	チドリ	チドリ	ムナグロ		NT
61	141	チドリ	シギ	ヤマシギ		NT
73	142	チドリ	カモメ	オオセグロカモメ		NT
74	143	チドリ	カモメ	オオアジサン	<i>Thalasseus bergii</i> (Lichtenstein)	NT
77	144	コウノトリ	コウノトリ	コウノトリ		NT
78	145	カツオドリ	ウ	ヒメウ	<i>Urile pelagicus</i> (Pallas)	NT
85	146	ペリカン	サギ	ゴイサギ		NT
86	147					NT
87	148	ペリカン	サギ	チュウサギ	<i>Ardea intermedia</i> Wagler	NT
88	149					NT
90	150	ペリカン	サギ	カラシラサギ		NT
97	151	タカ	タカ	ツミ		NT
98	152					リスト外
99	153	タカ	タカ	ハイタカ		NT
116	154	フクロウ	フクロウ	フクロウ		NT
117	155					NT
147	156	スズメ	ヒタキ	コサメビタキ		NT
148	157					NT
36	158	チドリ	チドリ	ダイゼンの越冬群(藤前干潟および庄内		LP
107	159	タカ	タカ	サシバの渡り群(伊良湖岬および温泉半		LP
130	160	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ		国リスト
131	161					国リスト